

一般社団法人  
日本新聞製作技術懇話会  
会報 (隔月刊)  
VOL.46 No.4  
2022.7.1  
(通巻 274 号)  
禁転載

# CONPT

Conference for Newspaper  
Production Technique-Japan

広報委員会編集  
編集人 下平 泰生  
東京都千代田区内幸町  
日本プレスセンタービル  
8 階 (〒100-0011)  
電話 (03) 3503-3829  
FAX (03) 3503-3828  
<http://www.conpt.jp>



## 目次

|                                                |    |
|------------------------------------------------|----|
| CONPT活動、再び軌道へ 2022年度 事業計画 .....                | 3  |
| 新聞メディアの潮流 欧州報告 (4) .....                       | 4  |
| 在英ジャーナリスト 小林 恭子 .....                          | 4  |
| 楽事万歳 富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ 専務執行役員 河合久仁浩 ..... | 7  |
| 第11回CONPT技術研究会 .....                           | 8  |
| 「新聞技術」4論考に技術委員会賞 .....                         | 9  |
| 美味あっちこっち 第一工業 富田 和稔 .....                      | 9  |
| ワーフェルさんと CONPT-TOUR 元 CONPT マネージャー 酒井 寛 .....  | 10 |
| CONPT 新体制 始動 .....                             | 10 |
| 新旧マネージャー挨拶 .....                               | 11 |
| わが職場あれこれ 日経首都圏印刷 茨城工場製作部長 渡辺 昌昭 .....          | 12 |
| 会員消息、CONPT日誌 .....                             | 12 |

- 表紙写真提供：CONPT-TOUR アーカイブ（スイス・ルツェルン）
- 表紙製版：㈱デイリースポーツ
- 組版・印刷：㈱デイリースポーツ

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は、5月19日に開催した定時総会で2022年度の事業計画を決定した。コロナ禍によって足踏みを強いられている事業活動を再び軌道に乗せたいとの期待を込めたものだ。

JANPS、CONPT-TOUR、工場見学、技術対話、新年名刺交換会…CONPT活動は、人と人が直接対話することを基本としている。コロナによる停滞が3年目に入った今年度、クラブ、企画、広報の3委員会と技術対話部会では、感染防止策、行動制限の動向に十分配慮をしながら活動拡大の時期を探る。

### 【JANPS2024へ向け始動】

次回JANPS（第24回新聞製作技術展）は2024年秋、リアル展示会として開催をめざす。これまでにない“新鮮で魅力的なJANPS”を実現する。

＊評議委員会メンバーによるJANPS運営委員会を立ち上げた。今年度は企画委員会や作業チームを中心に、CONPTが一体となって新しいJANPS像を検討。

### 【新聞社との技術対話】

日本新聞協会技術委員会の印刷部会、情報技術部会の在京メンバーとの意見交換および全国紙との意見交換をめざす。

＊技術対話活動は2016年スタート。地方紙やブロック紙のとの意見交換を進め、若手の方々の考えも聞くことができた。続いて次のステップへ進もうという段階で、コロナ禍により中断となった。今後は、「将来必要となる技術の探索」をコンセプトに議論を再開させたい考えだ。

### 【技術懇談会】

コロナ禍で見送りとなった新工場を含め、現地での見学・意見交換会の再開をめざす。

＊CONPTオンラインEXPOでセミナー「新聞印刷工場の最新技術紹介」を映像で配信したが、直接対面して意見交換ができる工場見学の再開を期待する声は強く、コロナの状況を見極めて計画を進める。

### 【CONPT技術研究会】

7月8日に第11回CONPT技術研究会を開催。年度内にさらに1～2回の実施を検討する。

＊西研グラフィックスが7月8日、新規事業である「クラフトビール事業」をテーマに講演した。（8頁に講演概要）

### 【会報CONPT発行】

例年通り年度内に6回の発行を予定する。

＊新聞社、新聞印刷工場の方々の協力を得て、寄稿を中心に年6回の発行が続いている。今後の編集方針として、記事や読者の幅を広げていくことを検討していく。

### 【会員社の相互理解、情報共有のための意見交換会】

工場見学会、講師を招いての勉強会などを計画する。

＊会員社間の相互理解を深める試みとして、椿本チエインのマテハン事業、モビリティ事業の開発・製造拠点である埼玉工場（飯能）見学会を7月20日に実施した。

### 【CONPT-TOUR再開へ向けた情報収集】

2020年から中断しているCONPT-TOUR再開の道を探る。海外の展示会、新聞メディアの動向について情報収集に努める。

＊2020年はdrupa視察を主体としたツアーを企画していたが、コロナの世界的な拡大により中止。2024年5月末開幕が予定される次回drupa、WAN-IFRA主催の展示会、海外新聞メディアなどに関する情報収集を続けツアー再開時期を探る。

# 報道侵害を監視、調査報道に助成金

在英ジャーナリスト

小林 恭子

## <19カ国の編集長らが「報道の自由憲章」>

報道の自由が保障されているのは、決して「当たり前」のことではない。その自由は常に侵害される危険性がある。欧州も例外ではない。

「報道の自由は民主主義社会にとって欠かせない。すべての政府はこれを支援し、擁護し、その多様性と政治・社会・文化的なミッションを順守する責任がある」。これは10カ条から成る「欧州報道の自由憲章(European Charter on Freedom of the Press)」の第1条だ。2009年5月、国家権力の干渉から報道を守るため、欧州19カ国の48人の編集長と編集幹部が憲章を採択した。報道の自由が欧州全域で保障され、欧州連合(EU)加盟の際の条件となるよう、署名者は憲章をEUの実務組織となる欧州委員会と欧州内の政治的・社会的分野における協力を促進するための機構である欧州評議会に提出している。

## <欧州委員会などの財政支援で運営>

憲章の順守を監視する組織として2015年に設置されたのが、ドイツ・ライプツィヒに拠点を置く非営利組織「ヨーロッパ・センター・フォー・プレス・アンド・メディア・フリーダム(ECPMF)」である。運営費は欧州委員会のほかには貯蓄銀行スバルタカッセ・ライプツィヒのメディア財団、ライプツィヒ市、ザクセン州、ドイツ外務省などからの財政支援による。

筆者は数年前からECPMFが主催する報道の自由を巡る会議に出席してきたが、強権政

## ◆域内ジャーナリズム支援の仕組み

治が続くハンガリー、愛国主義的政策を実施するポーランド、独裁政権に近いとされるベラルーシの報道侵害ばかりか、フィンランド、スウェーデン、イタリア、チェコなどでも政府や権力者、地元暴力団などによる圧力で記者を辞任せざるを得なくなる、場合によっては殺害される事例が発生していることを知った。今年2月末、ロシアによるウクライナ侵攻後、ロシアではウクライナ戦争を「特別軍事作戦」と呼び、当局による情報統制が厳格化している。報道の自由の重要さをことさら痛切に感じている。

今回の欧州報告では、ECPMFがどのように報道の自由を監視し、攻撃を受けたジャーナリストを支援しているのかを紹介したい。

## <侵害報告をプラットフォームに掲載>

ECPMFの活動の大きな柱の1つが報道侵害の監視だ。EU加盟国、加盟候補国及びその近隣諸国を対象にメディア関係者に対する脅し、違法行為、検閲などの侵害報告を受け付け、情報を「マッピング・メディア・フリーダム(MMF)」と名付けられたオンライン上のプラットフォームに記録している。MMFのサイト上でアルバニアをクリックしてみると、同国の最新の報道侵害事件が表示される。侵害発生日時、概要、関連のメディア記事、インターネット上の情報源、発生場所の地図などが掲載されている。

ECPMFはウェブサイトを通じて寄せられた侵害報告を欧州ジャーナリズム連合(EFJ)、国際新聞編集者協会(IPI)、欧州各

国にいる地元ボランティアの手を借りて確認し、プラットフォームに掲載する。緊急の支援が必要な場合、警察あるいは病院などの支援組織に連絡する場合もある。



報道侵害の監視記録

= ECPMFのウェブサイトから

情報は定期的に報告書としてまとめられる。2021年版報告書によると、攻撃内容を種類別に分けた場合、最多が「言葉による攻撃」(41.1%)だった。脅し、侮辱、信用を傷つける、嫌がらせ、トローリングを含むいじめなど。これに続くのが「法的手段」(25.4%)で、訴訟、逮捕・拘束・拘禁、尋問、報道の自由を侵害する法的手段、監視及びジャーナリストが持つデータの傍受、失職させる、名誉棄損など。「身体への攻撃」は21.1%で、殺害事件も発生した(オランダ、ギリシャ、トルコ)。「所有物・不動産への攻撃」は11.8%で、機材や所有物への攻撃、車や住宅への攻撃、あるいはコンピューターのハッキングなど。「検閲」は11.3%で、記者登録を恣意的に拒絶する、記者会見などへの出席を拒む、ウェブサイトにアクセスできないようにする、問い合わせに応じない、偽情報を拡散する、記事を掲載しないなど。(注：複数の攻撃が同時に発生する場合もあるので、上記の攻撃発生率の合計は100%を超える)。IPIなどとともに現地調査も行っている。また、侵害に直面するジャーナリストには法務相談も行う。

#### <移住や生活・住宅費の支援も>

自分の国にいては身に危険が及ぶ場合、

MMFは「ジャーナリスト・イン・レジデンス」プログラムを提供している。該当するジャーナリストは最長半年間にわたってライプツィヒに居住しながら仕事を続けることができる。住宅は無料で利用でき、生活費支援として毎月1000ユーロ(約14万円)が支給される。今年4月、ウクライナに住むジャーナリストに特化した同様のプログラムを開始した。最大20人までがコソボに住みながら、ジャーナリズム活動に従事する。コソボ政府の支援金を基に、移住費用が負担され、毎月の生活・住宅支援費も提供される。

#### <支援のためのファンド発足>

ECPMFのもう一つの大きなプログラムがEU内の国境を超えた調査報道の実践を支援するファンド「IJ4EU (Investigative Journalism for Europe=欧州のための調査報道)」だ。先のマッピング・プロジェクトは現状を記録し、これに対処するプログラムだが、IJ4EUは欧州内のジャーナリスト同士のつながりを強化し、将来のジャーナリズムを共に作っていくことを狙う。

具体的には、公益性がある調査報道を行うジャーナリストのチームあるいは組織に対し、助成金を提供する。2018年に試験的に始まり、22-23年度は123万ユーロ(約1億5000万円)に上る。今年からメディア組織の外で働く、フリーランスのジャーナリスト向けの助成金の枠を設けた。助成金を提供するだけでなく、研修、メンタリング、ネットワーキングの機会も設ける。今年の募集は9月に開始予定だ。

助成金の財源は公的組織及び個人献金者からの民間資金で、昨年度は欧州委員会の他に米「オープン・ソサエティ財団」、ノルウェー「フリッツ・オード財団」、フランスの実業家ニコラス・ブエチ氏、ライプツィヒ市からの財政支援があった。資金はECPMFとIPI、「欧州ジャーナリズムセンター」(EJC)が共同管理する。

### <スキル磨くオンラインセミナー>

スキルを磨くためのオンラインセミナーも定期的に開催している。直近では「国境を超える調査報道マスタークラス」(7月1日、21日)、「オンラインハラスメントへの対抗策編集室編」(7月29日)など。

過去に支援した報道プロジェクトがサイト上で紹介されており、例えば「オフショア・イン・アイルランド」報道は英調査報道グループ「ベリング・キャット」が英サンデータイムズ紙とともにアイルランド、英国、オランダにまたがって取材。チームは国際的なマネーロンダリングと汚職の実態を暴露した。IJ4EUからの資金援助額は約4万2500ユーロ(約600万円)。

### <優れた調査報道に「インパクト賞」>

IJ4EUは毎年、調査報道についての会議を開催するとともに、特に優れた調査報道には「インパクト賞」が授与される。2022年の最優秀賞は「ペガサス・プロジェクト」、優秀賞は欧州国境沿岸警備機関による不正行為を暴いた「フロンテックス・コンプリシット・イン・プッシュバックス」と欧州の難民収容所での過酷な体験記録「ログブック・オブ・モリア」。それぞれの賞金は5000ユーロ(約68万円)で、最優秀賞でも賞金の額に差はない。

「ペガサス・プロジェクト」は、2020年、フランスに拠点を置く非営利組織「フォービドン・ストリーズ」にリークされた5万件の携帯電話の番号が発端だ。世界中の野党政治家、人権活動家、ジャーナリストなどの電話番号だった。「ペガサス」とは、ここではイスラエルの企業NSOグループが開発したモバイル端末用スパイウェアを指す。監視対象者のスマートフォンからデータ、画像、会話内容、位置情報などを取得できる。調査チームは、入手した電話番号の半数にペガサスがアクセスした痕跡を見つけた。10カ国の報道機関に所属する80人を超える記者を巻き込んだの



2022年のインパクト賞受賞者の記念撮影

(3月31日、ベルリンの会議で)

=IJ4EUのウェブサイトから

「ペガサス・プロジェクト」として発展し、2021年夏から欧米の複数の主要新聞が報道を開始した。オルバン政権のハンガリーはEU加盟国の中で唯一、ペガサスソフトをジャーナリストに使った国とされている。

### <ジャーナリズムの質を高める>

欧州内のメディア組織やジャーナリストたちの結束を固め、ジャーナリズムの質を高めるECPMFの活動は注目に値する。欧州域以外の国でも、国レベルあるいは地域レベルでジャーナリズムを育て、活性化させるプロジェクトとして応用できるのではないだろうか。

一言付け加えておくと、ECPMFの活動は欧州全体の民主化を進め、EUの理念を欧州全域で広めるための政治的動きと言える。ウクライナ戦争を巡って欧州内が親ロシア派と反ロシア・親EU派に分かれるようになった今、かつての東西の冷戦を思わせるような文脈で位置づけられる部分があることを気に留めておいてもよいだろう。

#### ▽参考ウェブサイト

- ・ECPMF <https://www.ecpmf.eu/>
- ・マッピング・メディア・フリーダム  
<https://www.mappingmediafreedom.org/>
- ・IJ4EU  
<https://www.investigativejournalismforeu.net/>

誌上 CONPT-TOUR

# 歳万事楽

## 深川「どぜう」の縁

富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ 専務執行役員

河合 久仁浩

30数年前、東京で働き出して間もない頃に上司に連れられて「どぜう」をご馳走になりました。

深川の高橋(たかばし)という橋のたもと、江戸情緒の趣ある老舗で、上司曰く、味は駒形より上、とのことでした。残念ながら店はもう畳んでしまいましたが、その時に店からもらった団扇(うちわ)は今でも私の手元に残っています。



転勤を共にしてきた団扇

私は京都の西陣という伝統的な織物の街で生まれ育ちました。親父は西陣織の職人として自宅を作業場に、整経(帯を織るためにタテ糸を整える)といわれる仕事をしていました。うなぎの寝床と呼ばれる町屋が並んでいる地域で、近所には神社やお寺も多く、子供の頃は狭い路地や境内でよく遊びました。

＊

就職で上京して、営業畑を歩みながら転勤を東京→大阪→東京→福岡→東京→大阪→東京と経てきました。2度目の東京勤務からは家族を大阪に残して単身赴任となり、以来3度の東京では都内東側の下町、深川に住んでいます。

あの団扇に導かれた訳ではないでしょうが、ここは何か妙に落ち着く感じがして、自然と住む気になったように思います。

深川は、慶長年間(1600年頃)に摂津国(大阪～神戸の一带)の深川八郎右衛門が隅田川河口を埋め立てて深川村と命名したことに由来しているようです。江戸幕府は町割りを行うにあたり、建築物資などを運ぶために運河を整備し、深川界限はその要所となって、堀割り沿いには物資を保管する蔵が建てられ倉庫街となり、さらに、幾度かの江戸大火によって、日本橋や神田にあった寺社や貯木場が深川へ移ってきた、という変遷があるようです。

今も確かに神社仏閣が数多くありますし、最近では、天井の高い材木倉庫が大きな焙煎機を備えるのにふさわしいとして、リノベーションした珈琲店が沢山オープンし、カフェの街としての変貌もしています。私も自転車であちこちカフェを巡り、線香と焙煎の匂いが混ざる風を感じています。

＊

さて、コロナ禍のある時、近所の古本屋で題名に惹かれて「本所深川ふしぎ草紙」を買って読んでから、すっかり宮部みゆきの時代物にハマりました。ミステリーやサスペンス、推理の要素を入れた時代物で、深川界限を舞台とした作品が多く、新興地でまだまだ怪しい場所だった当時の様子や、そこで巻き起こる捕物話や長屋人情話など、とても身近に感じてしまいます。深川の地名や町名が登場するたびに古地図を眺めて、当時と今を比べて楽しんでいます。

あと、深川の魅力は下町食文化です。

葱とアサリを味噌で煮込みご飯にぶっつけた漁師飯の「深川めし」や、馬肉すき焼き「桜鍋」などの名物らしきものがありますが、何と言ってもここでの楽しみは庶民の懷に優しい大衆酒場です。新鮮な魚に、もつ焼きや牛すじ煮込みが旨くて安い、下町ならではの「せんべろ」名店が揃っています。

では、今宵も会社帰りに、何処か、ぶらりと一人でちょっと一杯ひっかけますか。

## 第11回CONPT技術研究会

### 新事業「クラフトビール」

#### 西研グラフィックス

日本新聞製作技術懇話会は7月8日、第11回CONPT技術研究会を開催した。新事業として「クラフトビール」に取り組む西研グラフィックスの並田正太社長が講演。新聞社関係21社29人(内オンライン13人)、CONPT会員社16社26人(内オンライン9人)の計55人と事務局4人が聴講した。



西研のサービスや製品は輪転機、キャリア、自動化ラインなどフロービジネスの傾向が大きい。経営の安定という面からみて、何らかのストックビジネスのモデルを構築したい——常々こう考えていたと並田社長は語る。梅野達郎専務と二人で新事業に挑んでいる。



講演する並田社長

#### 【並田社長の講演要旨】

##### ▽なぜ『クラフトビール』なのか

そもそもの始まりは中国の新聞印刷工場だった。工場の中で酒を醸造していて、白酒をふるまわれた。これがヒントになった。

社長も専務もビールが大好き。ビールは有史以来の飲み物だ。「熱意を持って取り組みそうな事業」だと思ったし、新事業は息の長い事業であることが必要だとも考えていた。

クラフトビールは小規模なブルワリーもしくは小規模な醸造単位による、個性的で多種多様な味わいをもつビールのこと。世界的に見ると生産量、金額とも大きな伸びを示している。日本では、ビール全体におけるクラフトビールの販売額は2020年に1%だったが、21年には2%と100%の成長を示した。これから伸び代が期待できるビールだ。

##### ▽醸造設備を間借り

ビールの醸造は自ら行っている。「ファントムブルワリー」という醸造設備を持たないブルワリーだ。縁あって広島のマイクロ(小規模)ブルワリーと交渉して、設備を借りた。

社長と専務が出張などの機会を利用して、九州から月に1、2回通い、醸造指導を受けてノウハウを蓄積。自分たちでほとんどの作業をこなせるようになった。この6月に、製品販売のための酒販免許を取得し、7月から販売するに至った。

製品は「GAME BREW」と名付け、ラガーの「LAGER-PLAYER」と長期保存のためアルコール度を高めたエールビール「IPA-ABOVE THE RIM」の2種類ある。初回生産はIPA約150ℓだった。福岡市内のビアバーの生樽分で、ほとんど予約で売れた。

8月中旬にはラガーとIPAを販売する予定で、樽を福岡市中心に出荷、瓶も小売りの予定だ。



##### ▽仕込み作業 1日の流れ

醸造所では朝9時30分から下準備に入る。材料である麦芽の粉碎や水質、ph、温度などの調整だ。続いて麦芽から麦汁を作り、煮沸槽にポンプで移動。煮沸と並行して苦み付けのポップや副原料を随時投入する。この工程が終了したら、香り付けのポップを注入し麦汁を勢いよく攪拌する。午後2時過ぎに麦汁を発酵槽へ移動し、麦汁の温度が下がるのを待つ。この間に機器の洗浄や片付け。

午後3時過ぎ、発酵槽の麦汁が発酵温度まで下がったことを確認して、酵母を投入する。仕込みをいわれるのはここまでで、掃除をして午後4時には作業終了となる。

#### ▽今後の展望は…

ゆくゆく、事業として確信が持てた段階で、発泡酒醸造免許を取得して佐賀でブルワリーを立ち上げたい。

当面は醸造設備の間借り先を複数開拓して、月産500ℓほどの生産で、営業の手応えを感じたい。並行して醸造免許の取得に動くが、設備投資のとりまとめ、販路の開拓、技術の研鑽が課題だ。

ビールに関連するビジネスの可能性も追求したい。マイクロブルワリーやクラフトビール販売に必要な設備の開発・製造、国産クラフトビールの輸出等々。

ビール事業の発端は中国の新聞印刷工場での体験だったが、考えてみると、温度管理された室内、タンクも置けるしっかりした基礎、張り巡らせた配管やチラーなど、印刷工場は酒造りのインフラが揃っている。もちろん乗り越えなければいけないハードルは多いが、これから勉強していきたい。

#### 「新聞技術」 4論考に技術委員会賞

日本新聞協会技術委員会は2021年度に発行した委員会機関誌「新聞技術」掲載の論考の中から、技術委員会賞4件を選定した。7月8日に開催した技術委員会で表彰式を行い、秋元隆史委員長が表彰状と副賞を手渡した。

##### 【上流部門】

▽「文字起こしサービスの開発」朝日新聞社：山野陽祐氏・新美茜氏・嘉田紗世氏＝新聞技術No.256

▽「輸送DX 新聞輸送の専門性を継承～輸送管理システムをサービス化～」読売新聞東京本社：池田智康氏＝新聞技術No.256

▽「クラウド利用とローコード開発による『あな特システム』の自社構築」西日本新聞社：野上真司氏＝新聞技術No.254

##### 【下流部門】

▽「輪転機の主機更新とユニットドライブ化によるコスト削減」読売新聞東京本社：小野輝雄氏・吉川創一郎氏＝新聞技術No.256

#### ラーメンどでん 西川口店

埼玉の二郎系ラーメンの店を紹介します。JR西川口駅から徒歩5分ほどにある「ラーメンどでん 西川口店」です。商店街に程近い公園の目の前にあり、お昼時には行列ができます。

二郎系ラーメンですので、通常のラーメンの2倍近いボリュームです(初めての方や自信の無い方は麺量を減らして注文できます)。豚の出汁がトロっと溶けた濃厚な醤油スープにゴワゴワした麺がよくマッチしています。特に味付き脂が美味で、こんもり盛られたゆでヤサイを引き立てます。後半は別オーダーした生卵に絡めて啜ったり、魚粉を溶かして食べると量が多くても飽きません。

おなかいっぱい、ご馳走様でした。

食べた後は苦しくてもうこりごり…と思



美味あつちうち

このボリューム!

第二工業 富田和稔

いくつか店を出ますが、次の日には、今度はいつ行こう…と思うのが二郎系ラーメン。これを涼しい顔で完食できる私は、まだ若いなぁと感じますが、徐々に増えてきた体重と相談しながら健康的な食生活を楽しみたいと思います。

ディープな街西川口にお越しの際はぜひこのディープなラーメンをご賞味下さい。

## ワーフェルさんとCONPT-TOUR

元CONPTマネージャー 酒井 寛

WAN-IFRA（世界新聞・ニュース発行者協会）の元Deputy CEO、マンフレード・ワーフェルさんが5月に逝去されたとの報に接し、CONPT-TOURでともに過ごした幸せな日々を思い出しています。

ワーフェルさんとの交流の始まりは、私が懇話会のマネージャーに就任して2年目、2004年のCONPT-TOURからでした。当時は、毎年6月に米国で開催されるNEXPO展を中心とした米国視察が主でしたが、3、4年に一度は欧米視察として、ヨーロッパに足をのびしました。



ワーフェルさん（左）と  
隅田川の屋形船で

（2010年、東京・越中島）

2004年はその欧米視察の年にあたり、ドイツ・フランクフルト郊外のIfra（国際新聞技術研究協会）本部を訪問し、ワーフェルさんを始めとしたIfraスタッフによる最新技術動向のレクチャーを受けました。その返礼としてIfra本部に近いレストランにスタッフをお招きし、ランチビールを傾けての懇談に花を

咲かせました。視察団の団長を務められたコニカミノルタグラフィックイメージングの畠山恵一氏は、締め挨拶の中で「来年10月はライブチビでのIfra展をぜひ視察したい」と発言、Ifra一同の拍手喝采を浴びました。

Ifra本部の訪問が契機となって、翌年からのCONPT-TOURは、Ifra展に合わせて10月開催となりました。一方、Ifraスタッフによる技術セミナーは、「Ifraセミナー」としてCONPT-TOURの目玉となり、Ifra展の会場で開催されました。ワーフェルさんの企画によるセミナーのメニューは最新技術情報の宝庫でもありました。

2008年6月の国際総合印刷機材展drupaに合わせたCONPT-TOURの際には、Ifraセミナーの会場として、フランクフルトからバスで1時間半ほどの風光明媚なリュエデスハイムのホテルの会議室が用意されていました。

Oh! my brother!

リュエデスハイムへようこそ!

こう言って歓迎の手を差し伸べられたワーフェルさんの笑顔は、忘れることのない思い出の一つです。

CONPT-TOURに対するワーフェルさんの生前の長年にわたるご尽力に深謝するとともに、ご冥福を心よりお祈りいたします。

※Ifraは2009年、WAN（世界新聞協会）と統合、WAN-IFRAが発足しました。

### CONPT新体制 始動

◎…日本新聞製作技術懇話会の2022年度新体制が始動した。評議委員会始め各委員会、作業部会は、6月度の会合をリアル及び一部オンラインにより相次いで開催。密な状態を避けるため、広い会議室を借りての開催が続く。

◎…評議委員会、企画委員会の主要テーマはJANPS2024。CONPT内の横断的な人選による作業チームの編成、コーディネーターの

必要性などを議論した。どのようなJANPSにしたいのか、その基本方針や骨子を日本新聞協会と協議していくことを確認。CONPT側の体制や考えを6月29日、清水会長と林副会長（JANPS事業統括）が協会事務局に説明した。

◎…5月の定時総会後の理事会で専務理事に選任された木暮喜彦マネージャーと大石高廣前マネージャーの業務引き継ぎは順調に進み、7月末をもって終了する。（次頁参照）

## 全員で力を合わせて

木暮 喜彦

2月8日未明に発生した「ホテルニュージャパン火災」で死者33人。翌9日には羽田沖でグラスDC-8が墜落「日航機羽田沖墜落事故」24人が死亡しました。二日続けての大惨事が起きたのが1982年。私はこの年の4月に日本経済新聞社に入社し、技術部に配属されました。日経では主に新聞印刷工場の建設、輸転機をはじめとする生産設備の更新、その後は東京と名古屋で新聞印刷工場の運営を担当しました。この春までの日経生活40年間の大半を新聞、とりわけ「紙」の世界に携わってきました。この度、大石さんの後任としてCONPT事務局マネージャーに就きました。

昨今の新聞の発行部数減少に新型コロナの影響も加わり、JANPSやCONPT-TOUR、新年名刺交換会など対面で行うイベントが休止

に追い込まれ、CONPTの活動が停滞しています。こうした中、今年2月にバーチャルで開催したのがCONPTオンラインEXPOです。この経験が今後のイベントにつながるものと期待しています。

CONPTの事務所があるのが内幸町の日本プレスセンター。このビルの特徴は半円筒のドーム屋根と白色レンガの外壁です。皇居周辺から見ると日比谷公園の緑の上にドーム屋根が頭をのぞかせます。外壁は一般的な赤レンガではなく試行を繰り返し完成した深みのある白色レンガ「ボソン・ホワイト」。近隣の高層ビル群には高さや大きさでは全くありませんが、ドーム屋根と白レンガが重厚な存在感を放っています。

CONPTがプレスセンターのように存在感を示し、元気を取り戻せるよう皆さんと力を合わせて尽力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

マネージャー交代

## お世話になりました

大石 高廣

5月の本会定時総会をもってCONPTマネージャーを退任いたしました。2015年の年末に引き継ぎ、6代目として6年と半年ほどお世話になりました。いつか、大先輩であります佐久間悌氏にお目にかかった時、「6代目というのは良い数字だよ」と言っていたことを覚えています。

工場見学会や技術対話会の開催、CONPT誌への寄稿などお願い事ばかりが多く、新聞社・印刷工場ならびに日本新聞協会の皆様、CONPT会員社の皆様のご支援ご協力をいただき、本日に至ることができました。長居して迷惑をかけたかな？ほんとにお役に立てたかな？との思いも交錯するこの頃であります。

CONPT活動は2020年初めの新型コロナウイルス出現を境に激変してしました。新聞社

へ何うことができず、JANPSや新年の名刺交換会も見送り。CONPT-TOURは台風19号によりフランクフルトで帰国が足止めになった2019年で中断してしまいました。

そして2022年、CONPT事業計画は、活動を再び軌道に乗せるべく、決意と期待を込めたものになりました。コロナ感染第7波も取りざたされていますが、感染防止に十分配慮しつつ、新聞界を活気づける活動が再開できることを祈念しております。

CONPT-TOURでは、スウェーデンの新聞社の方がおっしゃった「5年後には紙の新聞はなくなっているかもしれない」との予測が気になっています。間もなくその「5年後」になります。彼の国で果たしてどうなったのか、その報告が聞ける時が来るのを楽しみにしています。

大変お世話になりました。感謝申し上げます。

# わが職場

## 茨城の魅力と頼もしい仲間たち

日経首都圏印刷 茨城工場製作部長 渡辺 昌昭

日経首都圏印刷茨城工場は前身を「日経茨城高速オフセット」と言い、茨城県と福島県の一部に日本経済新聞を届けるため、1992年に設立された。2007年には輪転機を増設し朝日新聞の受託印刷を開始。当時、全国紙2紙を印刷する工場は全国初であったと聞いている。2016年、合併により現在の社名となって7年目を迎える。日経機は2018年に設備の更新を見送り休止、朝日新聞の受託印刷が業務の中心となった。

工場にはパノラマ新聞を印刷できる設備が備わり、先に述べたように全国紙2紙の並行印刷。当時は、パノラマ印刷もこなす繁忙で活気のある時期を過ごしてきた。そのためか、「特殊」と呼ぶような媒体をそつなくこなす従業員がそろっていて、今年4月に着任した私の目にはとても頼もしく映る。新聞業界には向かい風の吹く状況が続いているが、パノラマ設備がフル稼働できる日がくることを待ち望んでいるといった現在だ。

ここで、工場周辺や茨城県の魅力を少しお伝えしたいと思う。工場近くには日本の湖第2位の面積を誇る霞ヶ浦、その周辺には生産量日本一のれんこん畑が広がり、蓮の花が咲き誇る夏の景観は見事。霞ヶ浦やそこに注ぐ河川には多くの釣リスポットがあり、総延長100kmを超える自転車専用道も整備され、多くのサイクリスト達が集まる。少し足をのばすと、ネモフィラ、コキアで有名なひたち海浜公園、滝全体が凍結する袋田の滝などなど名所は多く、海の幸、山の幸の食べ物も豊富で、アレンジ料理も魅力。都道府県魅力度ランキングなるもので、下位にしているのが不思議なほど。観光大使のようになってしまったが、単身赴任の私としては、このような茨城県の魅力を満喫していきたいと思っている。

### 会員消息

#### ■新入会(会員総数38社)

\* (株)フジオ産業(7月1日付)

(〒115-0043)

東京都北区神谷2-6-8

TEL: 03-3902-9828

FAX: 03-3902-0972

代表者: 藤城 拓也氏(代表取締役社長)

担当者: 平本 敬三氏(営業本部長)

#### ■担当者変更

\* 東京インキ(株)

[新] 平地 喜久夫氏

(インキ営業本部インキ営業第1部課長)

[旧] 六本木 猛氏

#### ■新会友

大石 高廣氏(事務局マネージャー)

六本木 猛氏(東京インキ(株))

### CONPT 日誌

5月19日(木) 第2回定時総会(於日本プレスセンター。来賓3氏、会員社30社39名出席)

6月14日(火) クラブ委員会(出席6名)

16日(木) 広報委員会(出席8名)

20日(月) 企画委員会(出席6名)

技術対話部会(出席9名)

21日(木) 評議委員会(出席7名)

7月8日(金) 第11回CONPT技術研究会(於日本記者クラブ会見場。59名参加、内オンライン22名)